

マルチツールナイフを用いた保育実践の試み ～実践を通しての学生の育ちに着目して～

Trying to Use the Multi Tool Knife (Army Knife) on Practices of Early Childhood Care and Education: Focusing on the Growth of the Students in The Practices

小島 栄希 嶋崎 博嗣
KOJIMA Teruki, SHIMAZAKI Hirotsugu

要旨

近年、子どもの手先の不器用さが指摘されおり、調査を重ねるごとに不器用さは深刻化している兆候が顕著となっている。

そうした状況のおり、マルチツールナイフを販売しているビクトリノックス・ジャパン株式会社から東洋大学嶋崎研究室に子どものからだところの発達を促せないかという協同研究の打診が寄せられた。この研究打診を社会福祉法人A会（保育所）の理事長に共有したところ、協力できる旨の応答があり、ここに保育所、企業、大学の三団体協同による産学福連携のマルチツールナイフを用いた保育実践研究を平成27年11月から平成28年1月の間におこなった。実践の主たる実践者は、本学の将来、保育者を目指している学生である。

本研究では、学生が実践の計画・事前準備、実践実行、結果、反省を通じて、どのような育ちのプロセスが認められたのかを学生が実践後に提出した振り返り所感から、感情移入の強いと考えられるキーワードの抽出をおこない検討した。

検討した結果、上位3点の指摘を取り上げると、「実践への満足」「子どもの成長」「固有名詞記述（子どもの変化の具体的記述）」であり、学生にとって意味のある活動であったことが示唆された。また、全13回の実践の過程を考慮すると、実践前半の子どもの怪我を契機にして、実践に対する姿勢が変化したことが確認できた。その背景には、保育者、教員の支援を受けながら、自らが実践をおこなった際の子どもの笑顔、自信に満ち溢れた表情を確認できたことを実践に参加した学生全員で共有することができたことも大きな要因であったと考えられる。

本研究を通して、マルチツールナイフを用いた保育実践が子どもだけではなく、実践者にとっても有意義なものであることが確認されたが、一方でマルチツールナイフを用いるということで高位な危険と隣り合わせであるため、安全な使用方法、教授方法の構築や向上、関係者間の共通理解を深めていく必要性は、今後の大きな課題と言える。

キーワード：ナイフ 学生の育ち 協同 共通理解 保育実践

1. はじめに

阿部茂明他 (2011)、野井他 (2016) は、子どものからだの問題を30年以上にわたって継続的な調査をおこなってきた中で、からだのおかしさが調査を重ねるごとに深刻化している現状に警鐘を鳴らしている。また、谷田貝 (2016) も、様々な生活技能に関わる実技調査を継続的に実施し、生活技術の低下を指摘している。その背景として、便利で楽な生活になったこと、さらに養育者が安全性を意識するあまり、危険を避けることによる消極的安全教育が蔓延し、ナイフに限らずノコギリやハサミといった刃物を使えない子どもが増えていることに警鐘を鳴らしている。

こうした現況の中で、「ビクトリノックス・ジャパン株式会社」から、子どもの発達とナイフに関わる研究打診が東洋大学嶋崎研究室へ寄せられる。「ビクトリノックス・ジャパン株式会社」は子どもの発達を視野に入れ、2010年から社会貢献活動を実施しているとの事であった。その後、子どもの全面発達を視野に入れた保育実践の取り組みについて協議が進み、嶋崎研究室より、社会福祉法人A会 (保育所) 理事長にビクトリノックスの問題意識が明示され、三者での具体的保育実践に向けて打合せがおこなわれた。その中で、ナイフを用いた保育実践活動のねらいが共有され、平成27年度に、「マルチツールナイフを用いた保育実践の試み」として、「東洋大学嶋崎研究室 (以下、本学)」、「社会福祉法人A会 (以下、A保育園)」、「ビクトリノックス・ジャパン株式会社 (以下、ビクトリノックス)」の三団体協同による産学福連携の実践研究を実施することとなった。

保育実践を展開する前提として、平成27年6月、ビクトリノックスが中心となって子どもに対して保育を展開する者 (本学の学生、A保育園の職員) を対象としたマルチツールナイフを使用するワークショップがおこなわれた。その理由は、子どもを援助する側が事前にナイフを体験するためである。さらに、同年8月に具体的な保育実践の展開や評価について、3者で共通理解をおこない、9月に実践効果を推定するための事前調査 (子どもの手指の巧緻性調査/保護者評価による子どもの生活調査、保護者の意識調査、保育者の意識調査、学生の意識調査) が実施された。そして、その後、10月より本学学生が教員の指導を受けながら、主体となって保育実践を概ね週1回のペースで実施した。

こうした流れで本実践を展開した訳だが、本稿では、特に実践過程における学生の成長に焦点化し、報告をおこなうこととする。これまで、保育者養成における学生の実践的指導力の育成に関わって多くの報告がなされている。例えば、鈴木・大岩 (2013) は、学生の実習における課題とねらいの指導、松原 (2015) は、子育て支援に参加した学生の育ち、香月 (2016) は、ワークショップに参加した学生の育ちを通じた研究報告をおこなっている。

保育実践において、子どもへの安全管理は実践の基本と言える事項である。しかし、本実践はマルチツールナイフを用いた指導であることから、保護者に実践説明をおこない、同意を得たうえで、十分な事前準備と安全管理体制を意識する必要がある取り組みであった。本稿では、本実践を通して学生がどのような実践経験を踏まえながら、どのような学びを体得していったのかについて、実践概要を明示するとともに、学生の学びについて考察することを目的とする。

2. 実践概要

(1) 連携実践保育所：社会福祉法人A会 A保育園

本実践を連携して展開することとなったA保育園の概要を紹介する。

平成11年に社会福祉法人A会の前身となる認可外保育施設が設置された。その後、平成16年に社会福祉法人A会が設立され、平成17年に第一園保育所が設置、平成21年に第一園保育所分園が設置された。その後、平成25年に第二園保育所が設置され、現在に至る。なお、本実践が展開されたA保育園は、第二園保育所である。A保育園は、平成25年4月に設置された定員90名の保育所である。家庭的な雰囲気を心がけ、年齢に合わせながら子どもたちの自主性を大切にしたい保育を目標としており、異年齢保育もおこなっている。

また、実践研究をおこなう倫理的配慮として、本実践の試みに参加する5歳児クラスの13人の子どもの保護者に対して、実践前に、A保育園、ビクトリノックス、嶋崎研究室の連名で文書を配布し、実践の試みに対する協力の了解を得ている。

なお、A保育園は食育活動の一環として、包丁を使った調理体験を実施していることはあるが、ナイフを用いた工作や鉛筆削り等の活動を保育の中で取り入れたことはない。

(2) 連携企業：ビクトリノックス・ジャパン株式会社

連携企業であるビクトリノックス・ジャパン株式会社はスイスに本社がある130年の歴史を持つアーミーナイフ／マルチツールナイフの製造から始まり、現在は時計やアパレルなど幅広く活動するビクトリノックス社の日本法人である。日本法人であるビクトリノックス・ジャパン株式会社は、平成5年に設立されている。同社はナイフに対する正しい知識と安全な使用方法を普及させ、子どもたちの健全な成長への寄与を目的として以下のような社会的取り組みをおこなっている（表1）。しかしながら、下記の取り組みは、小学校入学後の学童期以降の子どもを対象にした取り組みであり、就学前の子どもを対象にした幼稚園や保育所における取り組みは実施されたことはない。

表1 ビクトリノックスジャパンの取り組み概要

平成22年	マルチツールを使った工作イベントの主催
平成25年	イベントでのナイフの貸し出し、工作キットのサンプルの無償提供、卸価格での提供によるサポートプログラムの開始
平成27年	「脳育体験応援プロジェクト」として「道具を使うこと」と脳の関わりを中心に、最先端の脳科学研究を推進・発信する活動をサポート
平成28年	「どうぐ体験応援団」を立ち上げ、教育関係者から異分野の団体に至るまで道具を使う体験交流の機会づくりを支援

なお、本実践を展開するにあたり使用したナイフは「ティンカー for KIDS」である（図1）。84mmのスイスアーミーナイフに、ナイフの先端が丸くなったナイフを搭載させたモデルで、子どもが初めて持つナイフをコンセプトに作成されたものである。



図1 ティンカー for KIDS

注)「ティンカー for KIDS」はナイフのほかに、つめやすり、つめそうじ、プラスドライバー、缶切り、マイナスドライバー(小)、せん抜き、マイナスドライバー(大)、ワイヤーストリッパー、リーマー、キーリング、ピンセット、ツースピックの全13種類もの多機能が付与されている

(3) 実践の展開

① 実践学生

本研究の実践に参加した学生は、本学子ども支援学専攻2年生、計9名(男子学生4名、女子学生5名)である。

本実践の参加過程については、嶋崎博嗣教員より1年次に担当したゼミ学生2名に、平成27年2月に実践参加について声掛けがおこなわれ、10名程度の参加者を募りたい旨説明がなされた。その後、9名の学生参加の申し出があった。その際、ナイフを用いた実践であるため、責任感を持って取り組む必要がある旨説明がなされ、その上で参加するか否かの態度確認がおこなわれた。そうした意思確認後に本実践の参加が決定している。

なお、子ども支援学専攻は、保育士資格、幼稚園教諭一種免許状を取得できる4年制の養成過程であり、将来、保育者を目指して入学してくる者が多い。本報告の実践学生は2年生であり、保育実習経験はない。なお、表2は本学の保育・教育実習時期を示したものである。

表2：本学の学生の実習時期

実習種別	実習実施時期
保育実習Ⅰ(施設)	概ね2年次2～3月
保育実習Ⅰ(保育所)	概ね3年次8～9月
保育実習Ⅱ(保育所) または、保育実習Ⅲ(施設)	概ね4年次8～9月
教育実習(幼稚園)	概ね4年次5～7月

② 活動期間

平成27年10月～平成28年1月に実施。

全13回、水曜日午後(14:45～15:30)を基本に実施した。実践は概ね週1回のペースでおこなった。第13回目の親子活動のみ、土曜日に実施した(以降の表3を参照)。

③ 実践事前準備と実践後の振り返り

実践を展開するにあたり、基本的には実践の事前準備を実践前の月曜日午前を中心におこなった。活動内容を教員と学生で協議し、事前リハーサルをおこなった。また、2回目以降は、子どもの様子を考慮に入れながら、活動内容を選定していった。実践に向けた事前準備時間は平均して5時間程度を要した。必要な物品については、学生から教員にリクエストがだされ、学内に保有・保管している物品であれば教員が手続きをおこない用意をおこない、学内に保有・保管していない物品は、教員または学生が外部で購入して用意した(学生に金銭的負担はない)。

なお、第5回目の実践までの活動の流れは、図2に示すような箇条書きメモで共通理解を図る体制

をとっていたが、第6回目以降は図3に示すような指導案を作成し、より綿密に計画すると共に、学生・保育者・教員間で共通理解を図った。

また、実践後の振り返りは実践直後に実施し、次回の課題を検討した。振り返りのおよその時間は、1時間30分程度であった。また、十分に話し合うことができない場合はメールなどでやり取りをしながら、課題点を出し合い、次回の活動に反映させた。

上記とは別に、振り返りレポートとして、各自の所感、反省、子どもの様子を教員にメールで提出をおこなった。

11月11日（水）ナイフ実践内容
<p>実践内容：切り絵づくり 事前準備：折り紙、台紙、ナイフマット、ナイフ、スティックのり13個、雑巾3枚、テーブル3台（フルーツポンチ使用時のもの）、いす13個 活動場所：2階和室、制作室（今回は2部屋に分かれてナイフを使用する）</p> <p>最初は全員制作室に集合する ① 導入（5分） ・ナイフ使用時3つの約束のおさらい、しまい方の復習 ・ナイフを引いて切ること、丁寧に作業することを子どもたちに伝える ↓ グループ毎に分かれて着席、マット、ナイフ、台紙を渡す ② 切り絵づくり（30分） 台紙に描かれている大きな星に折り紙を切ったものを貼り付けていく。 紙を切り、貼る際にはナイフをしまうことを徹底する。 星の切り絵を早く終了した子どもは周りの余白の切り絵やフレームの飾りつけを行う。 ③ 片づけ（5分） テーブルの上をまとめてみんなできれいにする。 ↓ 制作室に全員集合する ④ まとめ（5分） 今回の活動のまとめを行う</p>

図2 第5回実践の行動メモ

ナイフを用いた保育実践（第12回）		
●日時 1月 20日 水曜日		
●ねらい：①学生や園長先生と自分の鉛筆を比較し、削る技術の向上を目指す。 ②友達と関わりながら互いに教えあったりし、活動を楽しむ。		
●子どもの人数（男児：6名、女児：7名、計13名）		
●学生の参加人数（男児：A,B,C,D、女児：E,F,G,H,I）		
●大学の準備物：鉛筆、ブルーシート、ガムテープ、ビニール袋		
●保育所で準備していただきたい物：テーブル（アートで使用しているもの2台）、いす（13脚）、ごみ箱。		
子どもの動き（時間）	学生の動き	環境構成
	～14:45 制作室にてテーブル、椅子、道具を準備	● 子ども ▲学生、教師 ■実演者、説明者 ※準備は切り絵活動の態勢と同じ
14:45 制作室に集合、	<p>子どもの点呼</p> <p>14:45～14:55 導入(学生A) ①ナイフの使い方おさらい(3つの約束、しまい方、削り方)</p> <p>②本日の活動内容発表 園長先生とどっちが削れるか勝負することを伝える。</p>	
14:55～15:15 10分経過後とところで嶋崎先生からアドバイスもらう	園長先生にも子どもの中に入って一緒に削ってもらい、学生A学生B、学生Eも一緒に削り、良い例、悪い例を実際に見せる。	
15:15～15:30まとめ	片付け。 嶋崎先生による園長先生との鉛筆比較、次回予告(学生B、学生C)	

図3 第12回実践の指導案

④ 実践経過と内容

教員（嶋崎・小島）の助言やA保育園の意見を取り入れながら、学生が全13回の活動内容について細かな調整をおこないながら実践を展開した。具体的な流れは、表3の通りである。

表3 ナイフを用いた保育実践展開上の工夫と課題確認の推移

回数	日時	活動内容	実践上の工夫	次回への課題
1	10月7日	ナイフの約束 ・刃の出し入れ	パネルシアターで3つの約束(「もどす」「むけない」「ふざけない」)をまとめる。マルチツールナイフのツールクイズの導入。	ナイフをしまう時に怪我(1名)をする。「しまう動作」が課題として表面化する。
2	10月21日	刃のしまい方 ・フルーツポンチづくり	「しまう動作」を工夫。本体をしっかり持って刃を90度まで立て「おはよう!」とって起こし、本体を持ち替えて「おやすみなさい」と言いながらしまう。	怪我をした保護者からのお便りを学生と共有する。子どもとしっかり向き合うことを確認する。
3	10月28日	リーマーの使い方① ・缶ぼっくり作り	缶ぼっくりの周囲に飾り付けを行なうため、クリアファイルにはりつけビニールテープを用意する。	2回目の「しまう動作」を、今後も丁寧に継続していことを確認する。
4	11月4日	ナイフの使い方① ・枝を削る	作った缶ぼっくりを戸外で使用して遊ぶ状況を作る。枯れ枝をナイフで削り、破片を次回の切り絵づくりで利用することを試みる。	子どもが枝を切る際に怪我(2名)をする。事前準備や環境への配慮、また、子どもへの関わり方(注意の仕方)について課題を確認する。
5	11月11日	折り紙を切る① ・切り絵づくり①	テーブルが傷つかぬよう、ボードを用意する。様々な色の折り紙を用意する。面白い形に切った折り紙を意図的に取り上げる。	ナイフのしまい方が上達したものの、油断して脇見をして刃をしまったため怪我(2名)をする。次回以降、指導案を作成し、大学-保育園間、実践者間の連携強化を確認する。
6	11月18日	折り紙を切る② ・切り絵づくり②	意図的に怪我について振り返る。上手な子どもに手本を見せてもらう。	子どもの集中力や達成感を導く保育者の在り方について意見交換を行う。
7	11月25日	リーマーの使い方② ・切り絵づくり③	切り絵をより華やかに演出するため、リーマーで台紙に穴を開け、そこにカラーモールを通して飾り付ける工夫をする。その後、発表会を行う。缶と台紙で穴を開ける感触の違いを伝える。	次第に子どもとの信頼関係が生まれて来ている。子どもが次の段階の発達へと進むことができる関わりを模索していくことが確認された。
8	12月2日	ナイフの使い方② ・クーピーを削る	鉛筆を削る前段階として、まず柔らかい素材のクーピーを削る。クーピーは鉛筆に比べて折れやすいので、学生が「わざと折る」実演をする。	クーピーを持っている親指で、ナイフの背を押し出す動作が苦手な子どもが多い。時間を掛けて、削り方を伝えていくことを確認する。
9	12月9日	ナイフの使い方③ ・(色)鉛筆削り①	鉛筆を持っている親指で、ナイフの背を押し出す動作を実演をしながら確認する。	集中をしており、よそ見をする子どもなく、黙々と削っていた。鉛筆を持っている親指で、ナイフの背を押し出す動作を繰り返し練習することを確認する。
10	1月6日	ナイフの使い方④ ・鉛筆削り② (担任対決)	1か月ぶりであったため、ナイフの出し方/しまい方の復習を行う。また、担任保育者も鉛筆を削り、園長に上手さを判定してもらう状況を作り、子どもの意識の向上を図る。次回予告として、2枚の写真を出し、来週対戦することを伝える。	鉛筆の芯が極端に長かったり、逆に極端に短い子どももいる。バランスの良い鉛筆のペン先を意識させる必要があることを確認する。園長の言葉掛け(子どもがその気になる働きかけ)を参考にする。
11	1月13日	鉛筆削り③ (担任対決)	先週の予告が担任保育者であることを伝える。担任に勝つという目標を持って削る状況を設定する。次週の対戦予告も伝える。	鉛筆を削る際の危なっかしさがなくなる。ゆっくりで良いので、バランスの良い鉛筆削りになるよう、声掛けする必要があることが確認される。対決に敗れて悔し涙を流す子どももいたが、その気持ちを大事にすることを確認する。
12	1月20日	鉛筆削り④ (学生迷人对決)	学生3名との鉛筆削り対決を行う。中間チェックで、学生のバランスの悪い削り方を意図的に紹介する。1/23の親子活動で「お父さん・お母さんに勝てるよう頑張ろう」と伝える。	引き続き、バランスの良い鉛筆削りになるよう声掛けする必要があることが確認される。今回も悔し涙を流す子どもがいたが、その気持ちを大事にすることを確認する。
13	1月23日	親子活動	親子対決の状況を作り、子どもには自信を、保護者には育ちの認識を深めてもらえるよう状況設定を行う。子どもの鉛筆削りの上達を確認できるよう、削った鉛筆を個別に日付順に画用紙に貼り付け、保護者に渡す。対戦の後は、削った鉛筆でプラ板に似顔絵を書き合い、特性キーホルダーを作成する。	

ここでは、順次どのように実践が展開されていったのかについて、学生の実践の様子を中心に活動の概要を概説していく。

第1回目の実践において、学生がナイフを使っている際の約束事をパネルシアターを用いながら3つにコンパクトにまとめて、子どもと確認をおこなった（写真1）。具体的な教示語は、以下の3つである。

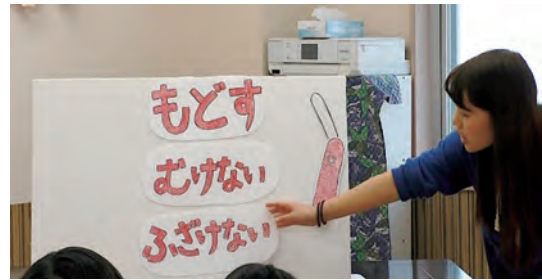


写真1 ナイフの3つのお約束

- ・ナイフを使ったら「もどす」
- ・ナイフを人に「むけない」
- ・ナイフを使っている人の周りでは「ふざけない」

3つにコンパクトにまとめることで、子どもも覚えやすく、第2回目以降の実践冒頭において必須の確認事項となった。「ナイフの3つのお約束」について学生が口にすると子どもが自然と口ずさむフレーズとなった。

第1回目の実践において、ナイフの出し入れの練習の際に、子どもが軽く指を切ってしまう怪我があった。実践後の振り返りで、学生より本体に収納されたナイフを取り出す際に力を入れなければならないが、5歳児にとってはかなりの力を要する動作であることが報告された。その点を改善するために、より安全な出し方やしまい方を協議した。子どもの動きと言葉の協応動作の観点から、図4の方法を考案した。

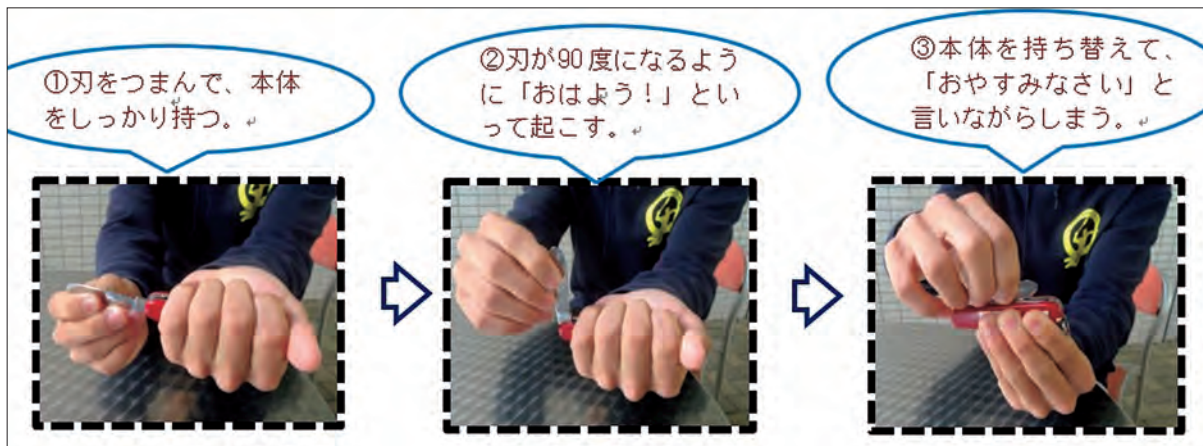


図4 ナイフのしまい方

第2回目の実践以降の実践においては、図4を確認したのち、活動を開始する流れとなった。掛け声があることによって、子どももタイミングや手順を比較的簡単に覚えることができていた。

第3回目の実践では、マルチナイフのナイフ以外の機能も利用することを意識して“缶ぽっくりづくり”をおこなった。また、リーマーで空き缶に穴を開けることだけでなく、缶ぽっくりに飾り付けができるようにデコレーションとして使用できるカラーのビニールテープをクリアファイルに貼り付け、子どもが思い思いの形にナイフで切り、缶に張り付けられるような工夫を学生がおこなった。

子どもはリーマーで缶に穴を開ける際に、力任せに開ければいいというものではないことを体験し



写真2 リーマーで缶に穴を開ける様子



写真3 ナイフでビニールテープを切り出す様子

ながら気づき、ビニールテープを切り出す際のナイフの角度、力加減を徐々に調節することに気づいていった。

第4回目の実践は、切り絵づくりの材料とするために「枝を削る」ことをテーマに、過去3回の実践が屋内での活動であったが、初めて屋外の公園での活動であった。枝を削ろうとした際に、2名の子どもが怪我をした。学生が子どもに教示したナイフを枝にあてた際に押し出すように削るのではなく、手前にナイフを引いてしまったことが原因であった。

事後の振り返りにおいて、枝の削り方について事前説明はおこなって始めたものの、何故怪我が起こってしまったのかについて協議をした。その結果、子どもの特性を十分に予想することができていなかったこと、さらに、特性に応じて実践を展開する状況が整っていなかったことが確認された。すなわち、公園の真横を走る電車の音で説明が子どもに届いていなかった、日差しなど園舎内とは異なる「環境」で子どもの集中力が散漫になってしまった、学生が子どもに注意することをためらってしまうなどの「子どもとの関わり方」の問題が挙げられ、反省点が確認された。

そして、その振り返りの中で、怪我の発生によって、ナイフ活動が中断した際、子どもS君の「ナイフなくなるの…、嫌だな…」の眩きがあったことが学生全体で確認された。そうしたS君の心持ちについて学生間で協議され、怪我による意気消沈した気分がある一方で、楽しみにしている子どもの気持ちについても考えることも協議された。その過程の中で、実践の前に、子どもがどのような行動をとるのかについて十分に予想することの大切さ、事前に準備することの重要性について話し合いがおこなわれた。また、枝を削ることは子どものナイフを取り扱う状況、安全に使用方法、教授方法が構築できていないため断念した。



写真4 第4回の実践がおこなわれた公園。丘の上の線路を電車が走行する。

第5回目から第7回目の実践は引き続き「切り絵づくり」がおこなわれた。特に安全に配慮することとして、折り紙を切って貼る際にはナイフの刃をその都度しまうということが徹底された。この徹底自体は機能していた。しかし、第5回目の実践でナイフをしまう際に、慣れから脇見をしてしまい、雑なナイフのしまいになってしまい2名が指を切る怪我をしてしまった。実践後の振り返りの中で、ナイフの怖さが次第に薄れ、慣れから扱い方が雑になっていることが確認された。次回以降、子どもに対して最後までナイフの刃をよく見てしまうこと、扱い方を間違えると、怪我につながってしまうことを伝えることが確認された。



写真5 ナイフをしまう子どもと折り紙を切り子ども



写真6 折り紙を三角形にきる子ども

第8回目の実践では鉛筆削りをおこなう前段階として鉛筆よりも柔らかいクーピーを利用して鉛筆を削る動作を習得する試みをおこなった。以下の3つ教示事項を確認しながら進めた。

- ・お箸を持つ手（利き手）でナイフを持つ
- ・逆の手の親指でナイフを押し出すようにクーピーを削る
- ・クーピーを持つ位置に注意する

また、クーピーは折れやすいため、学生が失敗と見せかけてわざと折る実演をおこない子どもに注意喚起をおこない子どもの集中力を高めることを心掛けた。利き手とは逆の親指で押し出す動作が苦手な子どもや刃の部分に指を当てそうになる子どももいたが、その都度、ナイフの刃について確認をおこなった。



写真7 学生が手を添えながらクーピーを削る子ども

第9回目の実践から鉛筆削りがテーマとなった。黒の鉛筆を削る前にカラフルなクーピーの流れを受け継ぎ、色鉛筆を削ることで子どもの集中力が削がれないようにとの配慮だった。しかし、学生が想像していた様子とは異なり、子どもはよそ見をすることももなく、黙々と削っていた。たまにザワついたりすると、子どもが「集中できなくなっちゃうからダメだよ！」と、注意をする状況すらあつ

た。実践終了後、集中して力が入り過ぎたせいか「ふ～！ 首が疲れた～！！」と呟く子どももいた。

第10回目の実践から13回目の親子活動の実践はいずれも本格的に「鉛筆削り」がテーマとなり、子どもと担任、学生、親子が対決するという状況を設定して、子どもの意欲を引き立てる工夫が成された。各回で必ず鉛筆削りの出来栄えの判定を園長や嶋崎教員がおこなった。

学生が意図的にバランスの悪い削り方をおこないながらの対戦をおこない、子どもにバランスの取れた削り方を促す試みもおこなった。

出来栄え判定で対決に勝つことができなかった子どもの中には悔し涙を流す様子も確認されたが、嶋崎教員が「悔しいからといって、泣いて話を聞かないのは・・・、マル？ バツ？」と問いかけると、手でバツを作り、涙を拭いて力強く立ち上がる姿を確認できた。

13回目の実践の親子対決では、子どもが保護者に鉛筆の削り方を教えている様子も確認され、保護者に子どもの育ちを認識してもらう機会となった。



写真8 色鉛筆を削る子ども



写真9 12回目の実践で鉛筆削りの出来栄え判定をおこなう様子



写真10 13回目の実践における親子活動で一緒に鉛筆削りをおこなう保護者と子ども

3. 実践参加学生の育ちの考察

(1) 学生の育ちの検討方法

全13回の保育実践終了後、学生が自身の実践を総括し、振り返り文書を自由記述で提出した。その文書から学生の“育ち”という観点を重視して、感情移入が強いと考えられるキーワードを抽出した。その上で、先に示した実践概要の経過を踏まえ、実践を重ねる過程でどのような育ちのプロセスが認められるかについて考察した。なお、振り返り文書は、教員宛に学生がメールで提出をおこなった。

(2) 学生の振り返り文書の指摘内容

学生の振り返り文書から、指摘件数が多かったものをまとめたのが表4である。指摘件数の多かったものとして、「実践への満足（9件）」、「子どもの成長（8件）」、「固有名詞記述（8件）」、「保育の展開に対する考え方の深まり（7件）」、その他、指摘件数6件のものが5つ抽出された。

以降、指摘件数が多かったもの順に、具体的なコメントを概観することとする。

まず「実践への満足」については、「ナイフ実践の集大成として行った親子活動ですが、率直に

すごく良い時間だったと思います」「今日はお父さん、お母さんに教えてあげるところまで成長していて、こんなに身近で子どもたちの成長が見られる、この実践に参加できとても光栄でした。子どもたちの姿に感動されっぱなしでした」「この実践に携わることができ、嬉しく思うと同時に、たくさんの協力をしてくれた（本学の）教員、学生、保育園の先生全員に感謝したいと思う」「今まで一番「達成感」を感じていたのではないかと思います。たくさんの大人を巻き込んで行う実践は楽しかったです」といった意見にみられるように、実践に参加して子どもや保護者からの笑顔はもとより、仲間や教師・保育者からの協力による満足感が表現されていた。

次の「子どもの成長」、「固有名詞記述」については、「Iくんに自信がつき、自分は常に負けているという考え方を改善することができました」「Sくんの父が、Sくんがナイフを動かす度に心配をする声をかけていましたが、Sくんは、大丈夫だから。といたげな顔をしていました。今日は親と子のコミュニケーションがよくとれていたようにおもいます」という記述から、担当していた子どもが実践を通して成長したことを確認すると共に、その喜びが記されている。さらに、数か月にわたる実践で、担当児に対する愛情が深まり、子どもの固有名詞が多く見受けられた。

「保育の展開に対する考え方の広がり」と「深まり」については、「11月の実践では失敗から準備する大切さを感じたが、今回（親子活動）は成功から準備する大切さを実感することができた」「導入やまとめもすごく工夫がされていて、初回よりもすごくうまくなったと思った。この実践で学生の成長も感じることもでき、また、私はまだまだでもっと頑張らなきゃなという気持ちになった」「削り方、鉛筆を意識させ、自分で考えさせるような声かけをすることができた」「子どもから質問されても、

表4 振り返り文書の指摘件数

キーワード	件数
実践への満足（感動、達成感、喜びなど）	9
子どもの成長（変化、笑顔、挑戦など）	8
固有名詞記述（子どもの変化の具体的記述）	
保育の展開に対する考え方の広がり」と「深まり」	7
子どもの怪我の直面	6
実践に対する不安・恐怖心・懸念の直面	
自己嫌悪・未熟さの自覚	
責任感の実感	
感謝の気持ち	

すぐに教えてあげるのではなく、子どもに「どうしたら良いと思う？」と問い掛けを返し、子ども自身が考えるように関わってみました」という記述から、事前準備の重要性を失敗の面からも成功の面からも実感した学び、学生同士の学びあい、子どもの自主性を尊重するために必要なかわり方を学生が考え、取り組んだ様子が確認された。

「不安・恐怖心・懸念」「自己嫌悪・未熟さの自覚」「責任感」などは、「(実践初期の) 事前準備では朝の打ち合わせにいくために起きるのが面倒だった」「Kちゃんに怪我をさせてしまう結果になってしまった。自分の注意が足りなかった」「全体としては段取りの内容を全員でもっと詰めて話し合っておくべきだったこと、事前の準備にしても、準備不足だったと思う」「なんとなくの流れを全員がわかっているだけではダメでした。すべて一からなをどう教えるか全てをみんなで共通することが必要」という記述がされており、実践の初期段階に前向きになっていなかった気持ちや怪我をさせてしまったという後悔や反省、学生自身が変わっていかねばならない振り返りが記されていた。

(3) 考察

学生の振り返り文書で感情移入されたキーワードを考察していく。

「実践への満足」に関する記述は9名中9名、「感謝の気持ち」は6名の学生が記述をしていた。学生Aは「今日はお父さん、お母さんに教えてあげるところまで成長していて、こんなに身近で子どもたちの成長が見られる、この実践に参加できとても光栄でした。子どもたちの姿に感動されっぱなしでした」と述べていることから、実践での取り組みや参加したことを肯定的に捉えていることを示している。ここから付随して実践に協力した保育園の職員、子ども、保護者、一緒に活動した仲間感謝の念を抱いている学生もいることがうかがえた。

「子どもの成長」、「固有名詞記述」はそれぞれ9名中8名の学生が記述をしている。学生Bの振り返り文書の中では、担当していたI君が常に自信がなく肯定的に自分自身を捉えられていない状況から、実践を通じて鉛筆削りに自信を持てるようになった姿から「Iくん自信がつき、自分は常に負けているという考え方を改善することができました」と述べており、実践を通じて子どもが変化していく過程に関わりをもったことにより、子ども理解が深まっていったことがうかがえる。保育・教育実習における子どもとの関わりは、概ね2週間から4週間程度であるが、本実践においては約4か月にわたる関わりの中で子ども理解が深まったものと推察される。

「保育の展開に対する考え方の広がり」と深まり」では、7名の学生から記述があり、準備不足や共通理解が足りないことなどからくる怪我による失敗を通じて、実践を「やりきる」から「ねらいを持って関わる」に変化していった様子が確認された。

「子どもの怪我の直面」に関連して、「不安・恐怖心・懸念」、「自己嫌悪・未熟さの自覚」、「責任感」という記述が6名ずつあり、すべて怪我に通じる部分があり、実践において「怪我」が学生の実践に対する取り組み方や保育に関わる意識の変化を促すことに大きくかかわっていることが確認できた。

これらの学生の感情移入のキーワードと実践の実態を基に学生の育ちの検討をしたところ、第4回、第5回の「怪我」を契機に大きく2つの段階があったものと考えた。その変化を図5に整理した。

第一段階は、第1～5回の実践が位置づき、図5の上段（事前準備①→実践①→実践①子どもの姿→実践①を通じた省察）が該当する。学生の振り返り文書を見ると、5回までの活動において「事前

準備では朝の打ち合わせにいくために起きるのが面倒だった」というコメントもあり、実践に取り組む姿勢が前向きになっておらず、そのためねらいが不明瞭で形式的な準備になりがちとなっていたと考えられる。例えば、パネルシアターで子どもの関心を引くことだけに意識が働き、「何を伝え、何に気付かせるのか」といった意識の掘り下げが不十分となり、子どもの楽しみばかりに目が向く活動になっていた側面は否めない。すなわち、子どもに目を向けた準備ではなく、学生自身がいかにか上手に保育を展開できるのかといった自分に目が向いた準備になっていたことが考えられる。また、4回目・5回目の実践で怪我が発生したが、学生の説明を聞かない子どもやナイフの扱い方の注意を守らない子どもに対して、しっかりとした注意ができなかった状況も確認された。その注意ができなかった背景には、十分な信頼関係が築けていないことに対する不安と共に、子どもに嫌われることに対する恐れや自分自身に対する自信のなさが確認された。そうした学生自身の意識が援助行動に影響し、結果的に怪我に繋がってしまったことが振り返り時に確認されている。しかし、子どもの怪我の事態に直面し、不安と戸惑いが大きくなるとともに、学生が自身の実践の取り組み方を振り返り、責任を痛感するとともに、自己嫌悪に陥った様子が確認された。

その反省から下段の第二段階（事前準備②→実践②→実践②子どもの姿→実践②を通じた省察）へと変化していったと考えられる。第一段階を振り返り、ねらいの明確化、子どもの姿、事前準備、話し合い、学生同士の連携、実践の流れを考えるために水曜日の実践のために月曜日の午前を中心に、約5時間をかけて準備をおこなうようになった。同時に学生自身のための準備から、子どもを中心に据えた議論となり実践のための議論の質が向上し、その結果、子どものナイフの技術の向上、子どもの表情が豊かになり、子どもと学生の信頼関係の構築、子どもが水曜日の実践活動を楽しみにする姿へとつながっていったといえる。

そういった過程で子どもの変化、成長への気づきとともに、自分自身の変化に気づきをもった。それは学生自身のできたこと、できないこと、子どもや同じ学生の仲間の特性を把握すること、怪我以降の取り組みの違いによる比較から、準備・計画の重要性の認識、保育の楽しさ、難しさ、考え方などの保育観の広がり の獲得であったといえる。

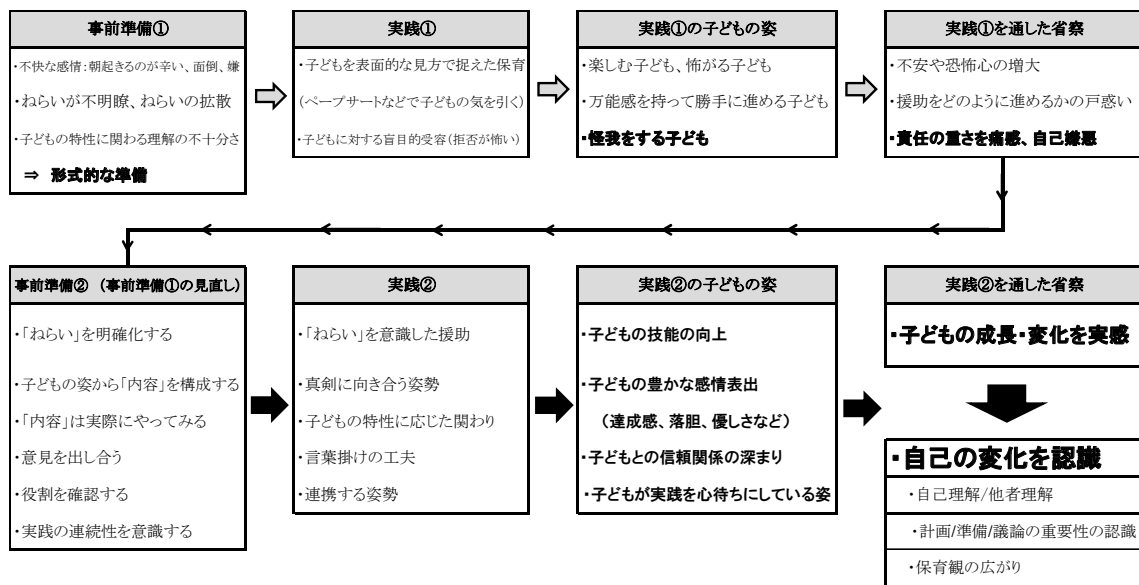


図5 学生の実践課程における取り組み方の変容

4. まとめ

本実践を通しての学生の育ちは、学生個人の力で得たものではない。保育者や教員の支えを受けながら、自らが実施した実践に対して表出される子どもの笑顔、できたときの自信に満ちた表情などに支えられながら、実践に参加した9名全員で喜びを共有したことが、大きな成長要因であったと考える。

本実践の日程は概ね週1回というタイトな日程となっていた。そのような状況であったにも関わらず学生の満足度が非常に高かったことは、「一人はみんなのために、みんなは一人のために」という学生同士の関係性が構築され、自らがおこなった実践による子どもからの正負のフィードバックを、個人ではなく協同で共有した点が、実践への満足感に反映したことが考えられる。実践をやりきった達成感を共有し喜び健闘し合うことあうこと、子どもの怪我による失敗・挫折からの立ち上がる際の支え、相互扶助という協同によらなければ超えることができない困難があった。本実践の学びが学生のこれからの保育・教育実習を取り組むにあたっての考え方の基盤となりうるものになっていくのではないかと推察する。

5. 今後の課題

本実践の課題は「怪我」である。子どもがナイフの扱い方を誤って怪我をした際には、A保育園の看護師などの適切な対処を受けることができた。また、A保育園が保護者に対して誠意ある対応をおこない、本実践のフォローをおこなっていただいた面も大きい。大学としても事故報告書の作成をおこなうなど可能な限りの対処、対策に努めた。そのため、第13回目の親子活動の実践につなげることができた。そのようなことから、子ども手の巧緻性の向上が見られたことだけではなく、子どもの心身の発達、学生の育ちを得ることができた。また、付言すべき事項として、1度怪我をした子どもは2度目の怪我をしなかった事実も、子どもの注意集中する力を考える際、貴重な事実であったと考える。

しかしながら、怪我を子どもの心身の発達、学生の育ちを得ることを理由に全面的に肯定的に捉えることは当然できない。子どもが安全に過ごすことは保育者の責務と言って差し支えないだろう。このことは、特に常日ごろ子どもの保護者と接する現場の職員には、怪我があったことを保護者に説明するにあたって、非常に大きな負担であったことは想像に難くない。高位な危険と隣り合わせの本実践を継続していくためには、マルツールナイフの安全な使用方法やその教授方法の理論の構築や向上、保護者、保育者、実践者の共通理解を図っていく必要がある。

付記 本報告は下記の発表を加筆修正したものである。

- 1) 小島栄希・西澤志穂・大島美弥子・斉藤千尋・伊藤則昭・嶋崎博嗣、「マルチツールナイフを用いた保育実践の試みⅢ ～ 実践を通しての保育学生の育ち ～」日本幼少児健康教育学会第34回大会【春季：青山大会】(2016)

引用文献

1. 阿部茂明・野井真吾・中島綾子・下里彩香・鹿野晶子・七戸藍・正木健雄、子どもの“からだのおかしさ”に関する保育・教育現場の実感：「子どものからだの調査2010」の結果を基に、日本体育大学紀要、41（1）（2011）
2. 野井真吾・阿部茂明・鹿野晶子・野田耕・中島綾子・下里彩香・松本稜子・張巧鳳・齊建国・唐東輝、子どもの“からだのおかしさ”に関する保育・教育現場の実感：「子どものからだの調査2015」の結果を基に、日本体育大学紀要、46（1）（2016）
3. 谷田貝公昭、不器用っ子が増えている－手と指は〔第2の脳〕－、一藝社（2016）121-123
4. 鈴木方子・大岩みちの、保育者を目指す学生の育ちを願って－実習における課題とねらいの指導－、岡崎女子短期大学研究紀要、46（2013）
5. 松原敬子、子育て支援における学生の育ち、植草学園短期大学紀要、16（2015）
6. 香月欣浩、子ども向け造形ワークショップ実施における学生の育ち、四條畷学園短期大学紀要、49（2016）